

トップアスリートの就職支援ナビゲーション アスナビがつなぐ企業と アスリートのWin-Winな関係

いよいよ1年後に迫った東京オリンピック・パラリンピック。経済同友会ではJOC(日本オリンピック委員会)と共に、トップアスリートを支援するアスナビを推進してきた。昨年の2月から今年の2月まで、経済同友会の会員所属企業に採用されたアスリートはすでに54人。さらなる支援のために、アスナビについてご紹介するとともに、就職を希望する7人のアスリートのプレゼンテーションの概要もお伝えする。



座談会

アスリート社員が企業を変える ～人や仕事をつなぐアスリートの“コネクター”力～

中村 公大 × 大石 栞菜 選手 × 大石 利樹 選手

(山九
取締役社長 COO)

(フェンシング/エペ
山九 総務・CSR部)

(フェンシング/フルーレ
山九 総務・CSR部)

義を見てせざるは勇無きなり——。そんな論語の一節から山九がアスナビを利用する意義を語ってくれたのは、同社の中村公大取締役社長COOだ。企業にとって、アスリートの採用はどのような意味を持つのか。中村社長と共に、山九に入社して5年目と3年目となる、フェンシングの大石栞菜選手(エペ)と大石利樹(フルーレ)の姉弟に登場いただき、採用する側とされる側からアスナビを語ってもらった。

アスナビとは

就職を希望している現役トップアスリートと企業のマッチングをする、JOCによる無料の職業支援制度。経済同友会では2010年のスタート時より会員企業への説明会を開催し、積極的に協力している。



山九 取締役社長 COO

中村 公大 (なかむら きみひろ)

1976年生まれ。2002年成蹊大学経済学部卒業、山九入社。11年執行役員、13年取締役兼執行役員、14年代表取締役専務取締役 事業・エリア管掌兼エリア統括、16年4月から現職。2014年4月、経済同友会入会。2018年度スポーツとアートの産業化委員会委員、2018年度労働市場改革委員会委員。

——中村社長はアスナビを利用して大石栞菜選手と弟の利樹選手を採用されましたが、もともとアスリートを雇用しようというお気持ちはあったのですか。

中村 アスナビで採用したのは栞菜選手が初めてですが、「アスリートを採る」という思いから採用したわけではありません。以前から、アスリートの人たちが社会人として競技を続けたいと思っても、仕事と競技の両立が難しくして競

技を断念してしまうという話はよく聞いていました。私の好きな言葉に「義を見てせざるは勇無きなり」があるので、われわれとしては手を差し伸べるタイミングが合えば、また、縁があるそれ相応の選手がいたら手を差し伸べたい、という思いがありました。

栞菜 採用していただいて光栄です。

中村 昨年当社は創業100周年を迎えましたが、これは自分たちだけの力で成し遂げられたわけではありません。社会やお客さま、世の中の支えがあって100年を迎えることができました。そうした精神が培われていることも、大石姉弟の採用につながったのだと思います。彼らがオリンピックで活躍して日本全体が元氣になればわれわれとしてもハッ

ピーです。それがかなわなくても、大石姉弟が引退を決断するまで悔いなく競技を続けることができれば、それだけでもハッピーだと思いました。

栞菜・利樹 ありがとうございます。

栞菜 私は山九に入社して5年目です。アスナビの存在は1期生である5歳上の先輩など

を通して知りました。フェンシングではもともとアスナビを使う方が少なかったんですが、アスナビを通じて就職し、競技に専念できている先輩たちを見たことで、これはすごくいい制度だと思ったので参加させてもらいました。

利樹 私は姉が山九で楽しそうだったことが大きいんです。大学卒業後もフェンシングを続けたいと思っていたんですが、具体的にどういう企業に入社して、ということまでは

大石 利樹 (おおishi りき)

1994年生まれ。2017年4月1日、定期採用で山九入社。
●2015年上海グランプリ大会個人13位／2015年ユニバーシアード大会個人13位／2018年全日本選手権大会個人6位／国内ランキング11位(男子フルール、2019年3月時点)



考えていませんでした。でも、姉がアスナビを通して山九に入り、試合会場に行くと社員の方々が一生懸命応援している。そんな姿を見たり、実際に姉に会社の話を聞いたり調べたりしているうちにいい会社だなと思い、入りたいと思うようになりました。

——アスナビの利点は何だと思いますか。

葉菜 入社してまず金銭面の心配がなくなりました。大学時代は親頼みで、父からは冗談で「兄も含め(フェンシングをしている)3人は金食い虫だ」と言われていましたし。

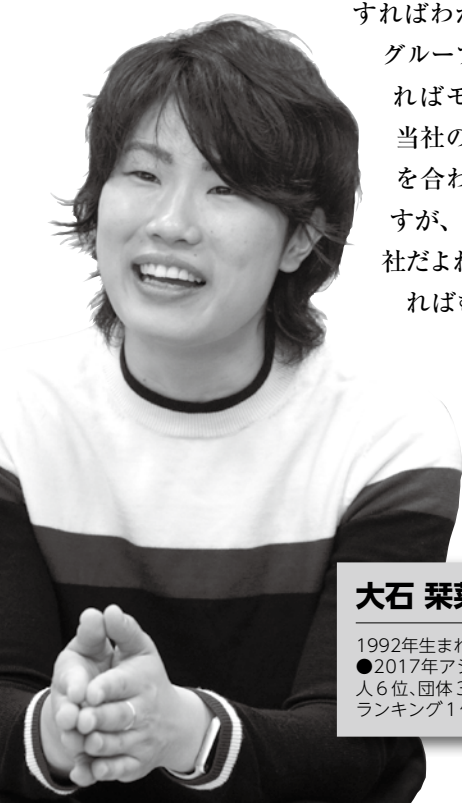
利樹 フェンシングをやろうとすると、全身をそろえて最低でも4万～5万円くらいかかるんですよ。

葉菜 W杯などの世界基準の試合で使う用具になると全身で一式10万円以上かかります。消耗品ですから負担は大きい。さらに、遠征費も大変です。W杯やグランプリなど海外の試合は1シーズンに多くて10試合くらいあります。私がこれまで経験した例では、日本からアメリカ経由でキューバに行き試合をして、その後、ポーランドとスペインへ行って日本へ戻ってきたことがあります。このときの費用は助成金で賄いましたが、100万円くらいかかりました。学生のときは費用の面で出たくても出られない試合ができてしまう。でも、今は全て経験できるので、それは強みですね。

中村 アスリートの雇用でコストがかかると考える企業は少なくないと思います。でも、社員たちは大石姉弟が活躍すればわが事のようにうれしいし、グループ報で頑張っている姿を見ればモチベーションが上がる。当社の日本国内社員はグループを合わせて今、2万人ぐらいですが、彼らに「山九ってすごい会社だね」って思わせる費用と考えればむしろ安いものです。

大石 葉菜 (おおishi かな)

1992年生まれ。2015年4月1日、定期採用で山九入社。
●2017年アジア選手権大会団体3位／2018年アジア大会個人6位、団体3位／2018年全日本選手権大会個人5位／国内ランキング1位(女子エペ、2019年3月時点)



——正社員として企業の一員として働くことへの不安はありましたか。

葉菜 それはありました。入社して5年目でも、出社は週1回なので、会社の業務はほとんどできない。来年27歳になるんですが、もし来年競技をやめたら27歳の新人。申し訳ないという気持ちですね。

利樹 私も同じく週1の出社ですので、フェンシングと仕事のバランスを考えると、ほぼフェンシングに傾いています。

中村 私はそれで構わないと思う。いま大石姉弟にやってもらっていることは、山九全体のモチベーションを上げることです。そのための手段として、2人が持てる才能であるフェンシングをできるだけ頑張る。それは役割分担で、人によって求められることが違うと思うんですよ。引退したらその役割が変わるから、そのとき仕事は勉強すればいい。ただ、当社は現場の人たちが危険で大変な仕事をするので糧を得ています。だから自分がすべきことに対して最大限の努力はしてほしい。

葉菜 はい。本当に皆さん温かくて。私は一人暮らしで、いつも同じメンバーと練習しているから、会う人が限られています。会社へ来れば同僚や他部署の方々と話すことができる。私にとって会社は刺激を受けたり、安心感をいただきたりする場所です。お金の安心と心の安心、両方をいただける拠所なんです。

利樹 試合に出て会社で応援してもらった経験も大きかったですね。大学生ではできません。同じ部署の人だけでなく、違う部署の人にも応援に来てくださるのは、なおさら「勝たなきゃ」というモチベーションになります。勝っていくことで皆さんに恩返しので

できれば、と思います。

葉菜 本当にそう。国体は開催会場が毎年違いますが、開催地の支店の方が応援しに来てくださって、すごくありがたいと思いました。国体に出る限り、会社のいろんな人と知り合いになれると思うとうれしいです。

中村 当社の社員はみんなお祭り大好きだから。社員たちも2人の試合を見に行ったら楽しいでしょうし、お子さん連れなら、「あれはお父さんの会社の人なんだよ」「うわー、すごい」ってなるじゃないですか。それをきっかけに、その子がフェンシングに進んでくれたり、山九に入社してくれたらうれしいですね。

——2人が入社されて社内に変化はありましたか。

中村 昨年開催した社の運動会でも変化は見られました。



それまで葉菜選手に会ったことがない社員も「あのフェンシングの人だ」と思ったら、話をしてみようと思ったでしょうし、そこで話の輪が広がったと思います。それが一つの効果ですね。仕事は一人では完結しません。仕事をつなぐコネクターには、なれる人となれない人がいます。彼女たちにはコネクターとしての役割がある。たとえ毎日出社していなくても、「葉菜ちゃんと握手したんだ」「一緒に走ったんだ」でも効果があるはずです。もし2人がオリンピック選手になったら1カ月は社内では話題になります。

葉菜・利樹 まさにオリンピックは私たちの目標ですから頑張ります！

中村 アスリートの雇用は目に見えるメリットだけではないはず。それをどこまで自分たちの中で落とし込んで、アスリートたちにも使命感を持ってもらえるかではないでしょうか。

——就職を希望するアスリートに伝えたいことは？

利樹 アスナビはアスリートと企業をマッチングさせる“集団お見合い”みたいなものです。アスナビ説明会では企業の方々に、「私はこういう選手です」とスピーチして自分を売り込みましたが、慣れていないからやはり難しい。



葉菜 私もそうでしたが、エントリーシートには自分の全てをさらけ出す文面を書け、と言いたいですね。

利樹 実際に山九に入社して、みんなの応援を考えても社員になることは、スポンサーという形でサポートしてもらうよりも得るものが大きいと思いました。それと、私は入社してからのこの2年間が一番、フェンシングの練習ができています。練習に専念できるのは、学生だったころとの大きな違いです。

中村 対戦相手が広がったことも大きいよね。

葉菜 そうなんです。海外には強い選手がいるのですが、



競技会で活躍する大石姉弟



2018年12月 第71回全日本選手権大会で5位入賞を果たした葉菜選手



同じく第71回全日本選手権大会で6位入賞を果たした利樹選手



中村 私たちはアスリートを採用してサポートをしてあげられますが、競技でどんな結果が出るかは分かりません。だからこそ、結果にこだわってしまうと魅力がなくなってしまうと思うんです。葉菜選手と同じエペの選手が10人いれば、トップになるのは10分の1の確率。会社としてそこに投資をするのは難しい。そうではなく、彼女たちの存在をどうやって社内で活かせるか。それは採用する側が考えるべき話です。当社はもともと現場の従業員が多く、体育会系の社風もあるので、アスリートの方々との親和性が高い。現場は「安全な職場がそもそもない」というくらい危険な仕事です。そこで働く人たちには使命感とそれに伴う覚悟があり、誇りを持って仕事をしており、アスリートに近い思いがあると思う。だから、2人が活躍すれば社員



日本は島国なので、フェンシングがよほど強くないと他国の選手が日本で合宿することはありません。自分が海外に行かないと外国人選手と練習する機会はほとんどないので、就職して海外に自由に行かせてもらえるようになったことは大きいですね。

利樹 社会人でも競技を続けたいと思っているアスリートには難しく考えないで、アスナビを活用して頑張ってもらいたいと思います。

——アスナビを利用していない企業に向けて中村社長からメッセージをお願いします。



のモチベーションも上がるんです。

葉菜 私たちのモチベーションも上がります！

中村 それと、今は人手不足だったり社員の定着率が悪かったりする時代です。実は当社はこの4月から女子ラグビーのチームも応援することになったのですが、それぞれ応援しているファンがいる。選手や彼らからみれば、「山九ってなんて理解のある会社なんだ」って思うじゃないですか。

利樹 本当にそう思います。

中村 だから、社内外を含めて「会社のファンを獲得する」という視点で見ると、スポーツを支援する意味があると思います。会社が持っている価値観とリンクするものがあるかないか。そこはすごく大事です。放っておいてもスポンサーが付く競技に当社が手を差し伸べることはありません。アスナビは、企業と助けを必要としているアスリートにとって、かゆい所に手が届くシステムです。いろんな企業の人たちに知っていただくことが必要だと思います。アスリートの中には、未来の金メダリストがいるかもしれませんから。「金メダリスト候補が野に埋もれるか表彰台に上がるかは、皆さんの決断にかかってます」くらいの“過大広告”をしても、私はいいと思うんですよ。



2017年に開催された愛媛国体では大分県代表としてそれぞれ団体戦に出場。団体戦では女子フルレで4位、男子エペで1位、男子フルレで4位と好成績を残す



団体エペ決勝戦で、1位が決定した瞬間の利樹選手

トップアスリートが企業にプレゼンテーション！ アスナビ説明会を開催

2019年3月20日、味の素ナショナルトレーニングセンターでJOCの協力の下、「アスナビ説明会」が開催された。経済同友会は就職を希望するアスリートと企業のマッチングの場として、2010年から会員向け説明会を実施しており、今回の開催が10回目となる。東京2020オリンピック・パラリンピックが近づき、選手への注目が集まる中、男女7人の選手が競技の魅力や意気込みについて、企業にプレゼンテーションした。



企業の担当者前で選手たちが 熱い意気込みで自己アピール

説明会の冒頭で、日本オリンピック委員会 (JOC) の荒木田裕子理事は、「アスナビで採用された選手は計176社273人*に上り、経済同友会の協力で大きな成果を挙げることができた」と実績を紹介。続いて、東京オリンピック・パラリンピック2020委員会の大西賢委員長

*2019年4月1日現在 計178社276人

は、「アスリートの採用は大きな社会貢献になる。2020年までに企業が選手をサポートするレガシーを根付かせたい」と挨拶した。また、横尾敬介副代表幹事・専務理事は、「アスリートを雇用した企業では、社員たちに感動や一体感を与えるといった効用が見られ、大変意義

深い」と挨拶。最後にバルセロナオリンピックにバレーボール代表として出場した植田辰哉氏が、選手に応援メッセージを送り、7人の選手たちによるプレゼンテーションが行われた。



荒木田 裕子 JOC理事



大西 賢 東京オリンピック・パラリンピック2020委員会 委員長



横尾 敬介 副代表幹事・専務理事

目標達成に向けては、どんな努力もいとわない



安 雅人 (やす まさと) フェンシング・エペ

●1998年生まれ(21歳)。茨城県牛久市出身。早稲田大学スポーツ科学部卒業見込み(2020年3月)。●小学2年生からフェンシングを始める。2017年全国ジュニア・エペフェンシング選手権個人優勝/2018年世界ジュニアフェンシング選手権個人75位、団体5位/2018年全日本学生フェンシング選手権大会個人準優勝・団体準優勝。

私はいかなるときも、文武両道を忘れずに頑張ってきました。高校を選ぶ際には、絶対に妥協しなかったもので、半年間、大好きなフェンシングから離れて受験勉強に打ち込み、県内トップの高校への入学を果たしました。目標を達成するためにはどんな努力もいとわない。そうした姿勢で競技する姿を社員の皆さんに見ていただき、元氣や勇氣、感動を与えていけたらと思っています。

何をすべきかを考え行動し、進み続ける



梅津 春香 (うめつ はるか) フェンシング・フルーレ

●1998年生まれ(21歳)。山形県米沢市出身。法政大学国際文化学部卒業見込み(2020年3月)。●中学2年生で親元を離れてJOCエリートアカデミーに入校。2015年全国高等学校総合体育大会個人優勝/2015年アジアカデ選手権個人優勝、団体優勝/2017年全日本学生選手権大会個人3位/2017年全日本選手権大会団体優勝。

オリンピックでメダルを取るために、12年間過ごした故郷を離れ、東京に出てきました。上京後、オリンピック出場を目指して書き始めた36冊のノートには、フェンシングに懸けた思いが詰まっています。私の強みは、今自分が何をすべきかを考え、行動し、進み続けることです。競技経験を自分の言葉で表現することで、企業の皆さまと喜びを分かち合い、共に進んでいきたいと思っています。

貪欲に学び続けることでは誰にも負けない



花村 拓人 (はなむら たくと)
陸上競技・800m

●1998年生まれ(21歳)。大阪府大東市出身。関西学院大学法学部卒業見込み(2020年3月)。
●中学から陸上競技を始め高校生の頃から国際大会に出場する。2017年日中韓3カ国交流陸上競技大会優勝/2017年国民体育大会準優勝/2018年セイコーゴールデングラプリ陸上5位/2018年日本陸上選手権大会5位/室内800m走で日本歴代2位の記録を持つ。

何事も貪欲に学び続けることでは、誰にも負けない自信があります。中学時代は大阪府大会にも出場できなかった私が、世界と戦うスタートラインに立つことができたのもそのおかげです。今後もこの強みを活かして競技力を向上させ、世界陸上、オリンピックへの出場を必ず実現させます。企業に入社した際にも、仕事と競技を両立させ、いち早く企業に貢献できるように努力します。

改善力とスケジュール管理力で仕事と競技の両立を



辻川 美乃利 (つじかわ みのり)
陸上競技・円盤投

●1995年生まれ(23歳)。大阪府大阪市出身。筑波大学大学院人間総合科学研究科修了見込み(2020年3月)。
●大学時代は陸上競技部の会計を担当する。2017年日本陸上競技選手権優勝/2017年日本学生陸上競技対校選手権大会優勝/2018年Singapore Open優勝/2018年日本陸上競技選手権準優勝/2018年日本学生陸上競技対校選手権大会準優勝。

大学で競技成績が向上しました。積み重ねてきた努力が花開き始めていると感じています。恵まれた体格を活かし、新たな進化を遂げることで、2020年、2024年のオリンピック出場は十分にかなうと信じています。仕事でも、持ち前の貪欲さと陸上競技部の会計担当として培った改善力、そして競技と大学院での研究を通して培ったスケジュール管理力によって、競技と職務の両立を実現したい。

最後まで諦めない姿勢で勇気や元気を与えたい



五十嵐 未帆 (いがらし みほ)
レスリング・女子50kg級

●1997年生まれ(22歳)。千葉県流山市出身。至学館大学健康科学部卒業(2019年3月)。
●小学2年生で兄の影響でレスリングを始め、大学4年時には主将を務める。2017年全日本学生選手権大会53kg級優勝/2018年全日本学生選手権大会53kg級優勝/2018年ワールドカップ50kg級日本代表・団体優勝/2018年世界大学選手権53kg級優勝。

大学4年生で主将を任され、チームの見本となるように心掛けるうちに、どんな状況でも乗り越えられる力が付きました。「得意淡然 失意泰然」の言葉を胸に挑戦を続けます。目標は東京オリンピックで金メダルを獲得し、お世話になった方々に恩返しをすること。人と人とのつながりを大切に、最後まで諦めない姿勢を持ち、社員の方々に勇気や元気を与えたいと思っています。

トッパスリートの活動拠点 味の素ナショナルトレーニングセンターを見学

アスナビ説明会に先立ち、日本のトッパスリートたちの活動拠点である味の素ナショナルトレーニングセンターの施設見学会が開催された。施設や用具などはどれも国際基準に沿ったもので、選手たちは日々、国際大会と同じような環境で練習を続けている。現在はパラアスリートも一体的に強化できる拡充棟(仮称)も建築中だ。見学会では、参加企業の方々がスタッフから詳しい説明を受けながら、フェン

シング、体操、レスリング、柔道などの練習施設を見て回った。フェンシングでは、参加者が剣を持つて的である人形に向かうなど、競技を体験する場面もあった。近年の日本選手の大活躍



室内トレーニングセンターの建物



フェンシング練習場



世界最大級の広さを誇る柔道場



の大きな要因が、この充実したトレーニング施設にあることを実感する見学会だった。

日本記録保持者の兄を追い越し世界へ



右代 啓欣 (うしろ ひろよし)
陸上競技・十種競技

●1994年生まれ(24歳)。北海道江別市出身。国士舘大学大学院スポーツシステム研究科修了(2019年3月)。
●日本記録保持者の兄の影響で競技を始める。2016年関東学生陸上競技対校選手権大会2位/2016年日本学生陸上競技対校選手権大会4位/2017年関東学生陸上競技対校選手権大会1位/2018年東京陸上競技選手権大会2位。

欧米では十種競技の勝者は「キング・オブ・アスリート」と称えられます。過酷な競技だからこそ、周囲に影響を与え、子どもたちに夢を与えられると思い、競技を始めました。日本記録保持者の兄をこれからは私が追い越す番だと思っています。目標のオリンピックに向けて、必ず成果を出します。そして仕事と競技を両立させ、社員の皆さまに応援していただけるように努力します。

周囲から信頼される誠実な社会人に



高橋 佳汰 (たかはし けいた)
スキー・ハーフパイプ

●1998年生まれ(21歳)。神奈川県横浜市出身。神奈川県立横浜修徳高等学校卒業(2016年3月)。
●小学5年生で競技を始める。スキースクールのコーチなどのアルバイトをしながら競技を続けている。2016年Japan jr Freeski Open 2位/2017年FIS杯Dalma Open(KOR) 4位/2017年FIS杯韓国選手権 2位/2017年コンチネンタル杯Cardrona(USA) 4位。

小学5年生で競技に出会い11年目になります。体が小さく、運動神経も特別良いわけではありませんでしたが、うまくなりたい一心で練習を続け、日本代表になることができました。より良い環境でスキーや仕事に専念できれば、オリンピックは夢でなくなると確信しています。競技で培った判断力や集中力、継続力を業務にも活かし、周囲から信頼される誠実な社会人を目指します。

その他の就職希望のアスリート

※年齢は2019年4月1日現在のものです

夏季競技選手▶▶▶		 藤田 深太郎 (21歳) 陸上競技・走高跳	 高橋 幸大 (27歳) 水泳・競泳 平泳ぎ	 谷 健友 (22歳) 水泳・競泳 長距離自由形
 上場 雄也 (35歳) バレーボール・ ビーチバレーボール	 横田 葵子 (21歳) 体操・新体操	 堺 亮介 (21歳) 体操・トランポリン競技	 田中 美紗樹 (21歳) セーリング・470級	
 野中 雅浩 (22歳) ウェイトリフティング・ +105kg級	 高橋 駿人 (22歳) 馬術・総合馬術	 ストリーツ 海飛 (24歳) フェンシング・サーブル	 馬場 晴菜 (21歳) フェンシング・エペ	
 吉村 美穂 (21歳) フェンシング・エペ	 村山 健太郎 (21歳) フェンシング・エペ	 中口 遥 (21歳) ライフル射撃	 緒方 良行 (21歳) スポーツクライミング	
 田畑 隼剛 (31歳) アーチェリー・リカーブ	 杉本 りさ (21歳) 空手・組手	 清水 那月 (21歳) 空手・形	 榎原 利基 (25歳) トライアスロン	
 生熊 悠人 (23歳) テコンドー・キョルギ				
冬季競技選手▶▶▶		 高原 宜希 (21歳) スキー・スノーボード スノーボードクロス	 村上 右磨 (26歳) スケート・スピードスケート	 小野寺 優奈 (21歳) スケート・スピードスケート
 伊藤 隆太 (30歳) ボブスレー	 宮嶋 克幸 (23歳) スケルトン			
パラリンピックを 目指す選手▶▶▶		 佐野 義貴 (50歳) パワーリフティング		

P08~10に掲載されている選手ら、トップアスリート支援についてのお問い合わせはこちら。

JOC キャリアアカデミー e-mail: career@joc.or.jp (アスナビ担当)
Tel: 03-5963-0354 ※電話受付時間は平日午前10時から午後6時まで

下記のアスナビのホームページでも、詳しい情報や就職希望のアスリートをご紹介します。
<https://www.joc.or.jp/about/athnavi/>